

# 文化史のなかの 〈知の電子化・電子書籍化〉

2010/12/11

## ◎ 発表者略歴

桂川 潤 (かつらがわ じゅん)

ブックデザイナー。1958年生まれ。立教大学大学院文学研究科修士課程修了。著書に『本は物である —— 装丁という仕事』(新曜社、2010年) 共著書に『本は、これから』(池澤夏樹=編、岩波新書1280、2010年)、『人権とキリスト教』(明治学院大学キリスト教研究所=編、教文館、1993年) 他

ウェブサイト <http://www.asahi-net.or.jp/~pd4j-ktrg/> (「桂川潤」で検索)

ブックデザイナーにとって電子書籍はいわば「商売敵」<sup>がたき</sup>。とはいえiPadを常用するわたしは単純な〈電子本否定論者〉ではない。書物やアーカイブの未来像を描くには、戦略的・複眼的な思考が必要となる。

今後十数年は中国やインドといった大国で出版需要が高まる。森林資源やパルプの資源争奪戦を想定すべき。

(新潮社装幀室長・高橋千裕氏)

〈書籍電子化〉をめぐる、いま注目されている一冊が、『本は、これから』(池澤夏樹=編、岩波新書、2010年刊)

本に深い関心を寄せる各界の37名が、〈書籍電子化〉を焦点に本の過去と未来を俯瞰し考え抜く書き下ろしエッセイ集。

## ▼ 執筆者一覧 (50音順)

池内了／池上彰／池澤夏樹／石川直樹／今福龍太／岩橋幸雄／上野千鶴子／内田樹／岡崎乾二郎／長田弘／桂川潤／菊地成孔／紀田順一郎／五味太郎／最相葉月／四釜裕子／柴野京子／鈴木敏夫／外岡秀俊／田口久美子／土屋俊／出久根達郎／常世田良／永井伸和／長尾真／中野三敏／成毛眞／南陀楼綾繁／西垣通／萩野正昭／長谷川一／幅充孝／原研哉／福原義春／松岡正剛／宮下志朗／吉野朔実

書籍電子化をめぐる、積極派、懐疑派、さまざまな論調がある中、常世田良(日本図書館協会理事)、長尾真(国立国会図書館長)という二人の図書館関係者が、「電子図書館」の未来像を描いている。

わけても、紀田順一郎(評論家・作家)の視点は、今回のシンポジウムに示唆する点が多い。

「私は電子書籍化の動きすべてに同意するのではないが、反発ばかりでは能がないと思っている。日本の出版界の先細りは、知識情報の獲得手段が書籍だけではなくになっていること。物流も時代に適合せず、さらに少子高齢化など構造的な変化による市場の縮小に一因があることも、すでに論じられている通りである。その解決法の一つが海外市場への進出であることは自明で、この機会に真剣に検討し直すべき課題ではないだろうか。

電子化を奇貨として、日本の書籍を何らかの程度に国際商品へと衣替えしようという出版人や著作者は現れないものか。考えてみれば、まさに電子書籍こそ日本文化を発信し、日本の書物の魅力や優秀性を売り込むための願ってもない武器であるはずだ。」(紀田順一郎「電子書籍の彼方へ」／『本は、これから』p.82-83)

「物である本」の特性をあざやかに喝破しているのは、詩人・長田弘

「本は、ハードウェアにしてソフトウェアであり、ソフトウェアにしてハードウェアである」

「ハードとソフトの分離」こそ〈書籍電子化〉の最大の特徴であり、ポイント → いいかえれば「物質性」からの解放。  
→ 肉体を「精神の牢獄」ととらえてきた西欧的知の行き着くところ。「物質性」からの解放とは、つまり「身体性」からの解放。  
身体的・物質的桎梏からの「精神の解放」は、西欧的知が渴望してきた永遠のテーマ。

- 1) ユビキタス・ライブラリ＝「どこでも書庫」  
→ 時空にとらわれない流動性、高速性、アクセシビリティ
- 2) 無限の収蔵、無限の共有 → 西欧的知の根底にある「宇宙図書館」への憧憬
- 3) 省資源性、省エネルギー性

以上のように〈書籍電子化〉のプラス面を確認した上で、以下では、7冊の本を切り口に、〈書籍電子化〉のマイナス面を検討していきたい。こうした問題をクリアできない限り、書籍電子化やアーカイブの電子化は、砂上の楼閣に過ぎない。

# 1 『図書館——愛書家の楽園』

アルベルト・マンゲル＝著 野中邦子＝訳／白水社／2008年

松岡正剛（編集工学研究所所長）が「読書家中の読書家」と目するマンゲルの魅力を堪能できる一冊。古今東西にわたる書物についての博識はもちろん、2006年という原著の発行年もあいまって、電子書籍への目配りや分析が加わり、興味つきない内容となっている。

マンゲルは言う。「無意味さと目的の不在」こそがこの宇宙の特徴だと。この世界に意味や秩序を求めるのはまず不可能な企てだ。それなのに人は情報を集める。「その欲求は、それ自体に価値がある」のだ。空前絶後のアレキサンドリア図書館からグーグル・ライブラリに至るまで、「人類の飽くなき収集欲」を、著者は鮮やかな筆さばきで追う。

人類のこうした情報収集欲は「不死」への欲求に裏付けられている。「死とは記憶の終わり」だからだ。

そんな観点から、著者は書籍電子化への疑問を投げかける。

CDに焼いたデータの耐用年数は、良くて10年程度と言われる。

1986年、BBCが250万ポンドを費やし、100万人以上の協力を得て、11世紀にノルマン人の修道僧によって作成されたイングランドの土地台帳『ドゥームズディ・ブック』を電子化した。このデータは、BBCの特別なマイクロコンピュータでしか判読できないレーザーディスクに収められた。おそらくBBCはデータの流出を恐れて独自の保存形式を採用したのだろう。ところがわずか16年後の2002年、このデータはいかなる手段によっても復旧することができなくなってしまった。

マンゲルは「現在も膨張しつつある人類のコンピューター上の財産は、いつ消失してもおかしくないという深刻な危険を抱えている」と警告し、「電子データの保存」と「実体としての印刷物の保存」の共存を強調する。

何よりも「どんな文章であれ、本でそれを読む行為は、コンピューターの画面上の文字を読むことと完全に等価ではない」(p.78)というマンゲルの指摘を、わたしたちは傾聴すべきだろう。

→2010年秋、日本でも各社から電子書籍用端末が発売された。

デバイスが乱立しているだけでなく、電子書籍のフォーマットも乱立している。困ったことに、著作権問題や違法コピーへの対策上、それぞれのデバイスが独自の電子書籍フォーマットを採用しており、出版社側もどのデバイス、フォーマットに合わせて電子書籍を作っていかかわからない状態となっている。新潮社装幀室の高橋千裕氏によれば、新潮社も書籍電子化については「様子見」状態という。

書籍電子化に関心の深いIT系版元の編集担当者と話していたら、やはりそんな悩みを訴えていた。デバイス毎に、書籍フォー

マツも、そして読者層も分断され、タコツボ化していくのではないかとその編集者は危惧する。

端末やフォーマットなど、本来は枝葉末節に過ぎない。ところがその枝葉末節が「電子書籍」では決定的なポイントとなってしまう。ハードやソフトの乱立と読者困り込みは、読者層を分断し、電子書籍の公共性や資料的価値まで低めてしまう。

→ 電子書籍の台頭で、デジタル・ディバイド（電子情報技術を使いこなせる者とそうでない者の格差）はさらに深刻化する。電子書籍のオリジナルソースは配信側のサーバに一元化され、「書物の読者」は、「アプリケーションのユーザ」へと転じる。配信側の一方向的なヴァージョンアップによって、テキストが次々と上書きされてしまう点、つまり「版」という概念がなくなってしまふ点も深刻な問題をはらんでいる。

## 2 『ルポ 電子書籍大国アメリカ』

大原ケイ＝著／アスキー新書／2010年

アメリカにおける amazon Kindle の大ブレイクを引き合いに、「日本でも電子書籍がブームになる」と喧伝される昨今だが、本書を読んで、彼我の出版事情を無視した論議に何の意味もないことを痛感した。

意外にもアメリカでは、「本」には「本らしさ」、すなわち「恒久的・普遍的に残るものであること」が要求される。「今しか売れない本」は「本」とはみなされないのだ。だから日本では一般的な「ムック」など存在しない。ハードカバーでがっちり製本された「本」は、概してきわめて高価だ。

そのかわり、「本」と「新聞・雑誌」の中間的存在として、「マスマーケット・ペーパーバック」の市場がある。かつて取次で雑誌や新聞と一緒に扱われた「消耗品」としての本だ。返品する場合も、全部を返品せずに表紙だけをむしり取って版元に送り、他は売り手側が自分で破棄するという。

なんとも即物的でアメリカらしい話だが、アメリカで「電子化」が進んでいるのは、主にこの「マスマーケット・ペーパーバック」の分野なのだ。なるほど、こんな本なら電子化した方がコストも安いし資源のムダもない。

マスマーケット・ペーパーバック市場では、ロマンス（女性向け）とSF（男性向け）が、主に電子書籍に浸食されている。きわどい内容の「ロマンス」を、書店でなく電子配信で買いたいという需要は多い。

2009年7月、電子書籍時代を象徴する事件が起こった。キンドルから配信されていたG. オーウェルの『動物農場』と『1984年』の一部ヴァージョンで著作権問題が発覚。アマゾンはその事実を通告し、返金もした上で、当該の電子書籍をいっせいに消去したのだが、買ったはずの本が忽然と消えたことに、少なからぬ読者がショックを受けた。まるでアマゾンがビッグ・ブラザーそのもののように思われたからだ。

たまたまオーウェルの作品についてレポートを書いていた若者が、キンドルの下線機能やメモまで含めて本を消されてしまった。若者は訴訟を起こし、15万ドルで和解が成立した。

この事件は、電子書籍のみならず、クラウド時代のコンピュータ環境を浮き彫りにする出来事だった。電子書籍時代に、わたしたちは「本」を所有できない。わたしたちが購入するのは、サーバ上の「電子情報にアクセスするための権利」にすぎない。

同時に、書籍電子化という「黒船」に脅かされるのは、書籍の定価販売を義務づけている日本の「再販制度（再販売価格維持制度）」だ。アマゾンはそれが崩れるのをじっと待っている。「守るべき日本の出版文化」などというスローガンも、実は「守るべき自分たちの既得利権」にほかならない、という著者の指摘には、<sup>うなず</sup>頷かざるを得ない。

→三菱電機インフォメーションシステムズが開発し、全国70自治体に提供している図書館システムで不具合が発生し、蔵書を検索しただけの男性が「サイバー攻撃をした」と誤解され、偽計業務妨害の疑いで逮捕される事件がおこった（読売新聞

2010/11/29朝刊記事)。ハッカーやサイバーテロの攻撃だけでなく、システム自体の不具合や脆弱性によって、個人情報のみならず、利用者自身が重大な危険にさらされる恐れがあることも想定すべき(→「アクセシビリティ」や「利便性」の裏返し)

# 3 『グーグル秘録——完全なる破壊』

ケン・オーレッタ=著, 土方美奈=訳/文藝春秋/2010年

世界はグーグル化された。グーグルを率いるのは冷徹なビジネスマンではなく、冷徹なエンジニアだ。彼らは人間の行動を数式やアルゴリズムで規定できると信じている。CEOのエリック・シュミットは「我々の目標は世界を変えることだ」という。著者は「無邪気さと情熱」こそグーグルの特徴と指摘する。グーグル・ライブラリや書籍電子化問題などに見られる旧来のメディアに対する無神経さは、その典型だ。

グーグルの持つ膨大な検索情報は、メディアや広告ビジネスの在り方を根本から変えた。ビル・ゲイツ率いるマイクロソフトの息の根を止めるクラウド・コンピューティングも着々と進行し、グーグルは無敵の無料情報サービスを開拓しつつある。

エリック・シュミットは「愛国者法」を、プライバシーを侵害し、大統領に過剰な権限を与えるとして厳しく批判し、グーグルの中立性を強調している。しかし、グーグルが蓄えた膨大な検索情報が、どこに向かうかはわからない。彼らがいくら「金は世界変革の手段にすぎない」といっても、彼らが検索情報から莫大な利益を得ているのも、紛れもない事実だ。

そして本当の恐ろしさは、個人情報を含め、ありとあらゆる検索情報が、グーグルという特定の企業のサーバーに集約されること、それ自体なのだ。もはや、わたしたちはグーグルなしにコンピュータを使うことができない。そしてわたしたちが「グーグル」毎に、グーグルのデータベースは刻一刻と巨大化していく。

→ 電子書籍は2010年末現在、標準フォーマットがなく、いまだに手探り段階だが、携帯端末からパソコンにいたるあらゆるデバイスでを念頭に置いた「Google ブックス」「Google エディションズ」構想は、書籍電子化を実質的に牽引し統合していく恐るべき潜在力を秘めている。わたしたちは、能天気な「Google ブックス」を歓迎してはいられない。電子書籍はグーグルの世界戦略の一端にすぎない。グーグルが究極的にめざしているのは、クラウド化された環境で、コンピュータに関するすべての情報をグーグルのサーバに集めることのようなのだが、その動きには得体の知れぬ宗教性すら感じられる。

→ 「元来、日本は図書館や蔵書機関の書誌データ、あるいは総合的な出版目録などを作成し、効率的に運用することに不熱心であった。(中略)……これに反してグーグルやヤフーの書誌検索システムや著作権獲得の動きなどは、おどろくべき計画性と執念に裏打ちされているように見える。「黒船到来」というよりも、元来西欧文化史の根底に遺伝子のように見え隠れする「全世界図書館への情熱」と関係があるのではないか、とさえ思ってしまう。(中略)……情報のグローバル化が進行している時代に世界図書館の構想が出現するのは、じつは時間の問題だったといえないだろうか。そして、政治・経済の現実から見れば、その種の作業が国家的・公共的事業として実現することはあり得ないのも、また確かなことだったのである。」

(紀田順一郎「電子書籍の彼方へ」/『本は、これから』p.80—81)

# 4 『アップル、グーグル、マイクロソフト ——クラウド、携帯端末戦争のゆくえ』

岡嶋裕史=著/光文社新書/2010年

「私はこちら側の世界が好きなのです。あちら側で暮らしたいと思ったことは、ありません」。マイクロソフト会長のビル・ゲイツの言葉が、「クラウド」という新しいコンピュータ環境を端的に物語っている。



「こちら側」とは、ウィンドウズOSのように、パッケージされ、店頭で買えるソフトとサービスの世界。「あちら側」とは、ウェブサイトで動く「雲のようなソフトとサービス」、つまり「クラウド」の世界だ。

クラウドは、そもそもコンピュータのアーキテクチャーに関する概念だが、技術者の想定をはるかに超えて、急速に「クラウド化」が進んでいる。iPhoneやオバマ大統領が愛用しているブラックベリーのような超高性能の携帯端末の登場で、パソコンやパッケージソフトはもはや不要となりつつあるからだ。グーグルが開発したブラウザ上で動作する高性能アプリケーション「クローム」は、マイクロソフトのOfficeの息の根を止めかねない潜在力を持つ。アップル社はあえて「クラウド」という言葉を避けながら、iPodやiPhone、iPadの投入でしたたかに「クラウド」の喉元を押さえている。

→「クラウド化時代」の到来は、従来のコンピュータ環境を一変させる。「クラウド化」によって、コンピュータやソフトを買って所有するという概念はなくなり、発信側はホスト・コンピュータに一元化され、使用者は「端末のユーザー」にすぎなくなる。書籍電子化も、コンピュータの「クラウド化」と軌を一にして進められている。

# 5 『ネット・バカ ——インターネットがわたしたちの脳にしていること』

ニコラス・G・カー=著、篠儀直子=訳／青土社／2010年

著者ニコラス・G・カーは『ガーディアン』紙などでコラムニストをつとめ、テクノロジーを中心とした社会的、文化的、経済的な問題を専門とする著述家。本書でもその幅広いフィールドが十分に生かされ、近視眼的なインターネット讚美が、人間の脳そのものに及ぼすインターネットの重大な影響をいかに軽視しているかを、説得力あるデータと論考によって警告する。

UCLA (University of California, Los Angeles カリフォルニア大学ロサンゼルス校) の精神医学教授であり、記憶・加齢研究所所長でもある、ゲーリー・スモールは、2008年にインターネットの使用に応じて人間の脳が変化していることを実証するための実験にとりかかった。その結果、ネット検索を行うときと、本を模倣したテキストを読むときで、脳の活動がきわめて異なることがわかった。

本を読む人の脳は、言語、記憶、視角処理と関連する領域が活発に活動するが、決定や問題解決を行なう前頭前野ではあまり活動がみられない。ところがネット使用者の脳では、それらの領域すべてで大規模な活動が観測された。「ネット・サーフィンは脳の多くの機能に関係するので、高齢者の脳を明晰に保つ助けとなるかもしれない」とスモールは考えた (p.173)。

ところが、その後の研究で、ネット使用時の前頭前野の活動は「リンクに行き当たるたび、それをクリックするべきかどうか」の判断に迫られた結果にすぎないことが分かった。ハイパーテキストは認知的負荷がきわめて大きく、むしろ、読んだ内容を理解し記憶する能力を弱体化させてしまう。(p.179)。

1980年代は、リンクを張り巡らせたハイパーテキストが熱狂的に賞賛された。ハイパーテキストは、印刷されたテキストの「頑固な物質性」から読者を解放すると喧伝された。ところが、その予測は当たらなかった。リンクを散りばめられたテキストを読む人よりも、直線的なテキストを読む人のほうが、より多く理解し、記憶し、学習していることが、研究によって示されている。

脳はメディアに応じて自身を大規模に再組織する。かつてマクルーハンが「われわれの思考や行動に影響を与えるのは、メディアの伝える内容よりも、むしろメディア自体」だと述べた。「ウェブ文化支持派も懐疑派も、この(マクルーハンの)視点を見落としている」という著者の指摘は鋭い。

→松岡正剛(編集工学研究所所長)主催「ブックパーティスパイラル」(2010/11/6・青山スパイラルホール)のディスカッションで、作家の佐藤優は「情報専門家は、スクリーン上の文字や、パワーポイントなどは使わない。記憶に定着できないからだ」と述べ、進化生物学者の長谷川真理子は「すべての本が電子書籍になってしまったら、人間の知的水準はガタ落ちになる」と警告する。

→ブックデザイナーであるわたしは、電子書籍が「テキスト理解」を劣化させないか危惧している。直截な例だが、ディスプレイ上では文字校正ができない。確実な校正をするためには、どうしてもプリントアウトせざるを得ない。これは文字を扱う人々が異口同音に語っていることだ。テキスト理解の前段階ともいべき「校正」においてすら、モニタとハードコピーで差が出るとすれば、「物質性を欠いたテキスト理解」は、従来の「読書」とまったく異質のものとならざるをえない。

# 6 『書物から読書へ』

ロジェ・シャルチエ＝編 水林章・泉利明・露崎俊和＝訳／みすず書房／1992年

歴史学者のロジェ・シャルチエを編者に、さまざまな研究分野に属する10人余りの研究者が「読書」という文化行為の歴史と現在、その具体的な形態とそれが持つ意味を明らかにしようとした共同研究。巻末に収められたロジェ・シャルチエと、社会学者ピエール・ブルデューの対論が、この共同研究の結論を簡潔に示している。

「読書とは常に多様なものです。たとえテキストが付与されることを望んでいる意味をその内に含んでいるとしても、テキストの意味をさまざまな仕方で構築していくのはこの多様な読書なのです」(ロジェ・シャルチエのコメント p.347)

「われわれが読者としてもつすべての暗黙の前提に反して、書物は誤読をとおして、すなわちテキストに関する認識を武器とする正統的な読者には誤読と思えるものをとおして働きかけることができる」(ピエール・ブルデューのコメント p.353)

シャルチエは文化的なモノを「みずからのものにする」ことをアプロプリアション (appropriation) = 「我有」と呼ぶ。従来の「書物の文化史」は「所有」(possession)に関心を払ってきたが、「所有」から「我有」へ、「書物」から「読書」への視点の移動こそ、シャルチエの関心の核心である。

読書という行為が、単にテキストを受動的に受容するだけの行為ではないことを、この共同研究は具体的、論理的に示してくれる。

# 7 『本は、これから』

池澤夏樹＝編／岩波新書／2010年

哲学者であり評論家である内田樹の一文が印象に残る。実際にiPadで電子書籍を読んだ体験から、電子書籍の最大の難点は、いったい本の「どこを読んでいるのかわからない」こと、だと内田は指摘する。電子書籍の最大の難点は、「おのれ自身を含む風景を鳥瞰する力」(=「マッピング」)を読者にもたらしることができないという点だ。電子書籍は、人間の「先駆的直感」を失わせてしまう、というのが内田の結論である。

「書物よりもコンテンツのほうが大事」という社会学者の上野千鶴子も「デジタル・アーカイブの最大の問題は、何年かおきに媒体の移転を継続しつづけなければならないコストがあまりに膨大」であることと、その欠点を冷静に指摘する。

詩人の長田弘は、本の特性を「ハードウェアにしてソフトウェアであり、ソフトウェアにしてハードウェア」と喝破する。ハードとソフトを切り離してハードの革新のみを追求する電子書籍は、しょせん「本という文化」「読書という文化」の特性である「ゆっくり」とは相容れない。「ゆっくりと開かれてゆく時間をたもつ」ことなしに、新しい本の在りようは見えてこないはず、と長田は指摘する。

書籍電子化に対するこうした疑義に対し、常世田良(日本図書館協会理事)、長尾真(国立国会図書館長)ら、主として図書館関係者が、電子書籍のプラス面のみを強調し、「電子情報の脆弱性」に象徴されるマイナス面に触れようとしないのが印象的。

対照的な議論の間で、土屋俊(哲学)が示した「最悪のシナリオ」には、ドキリとさせられた。書籍電子化にまつわる混迷を放置すれば、立ち行かなくなった既存の印刷メディアの出版産業は衰退し、それにとって代わるべきデジタル、オンラインの情報産業も形成されないまま、わが国から自律的な情報流通が消滅する、という戦慄の予想である。

→出版はいま、八ツ場ダム建設問題に翻弄され引き裂かれる、川原湯温泉郷の住民と同じ状況にある。住民たちは、代々の故郷に住み続けることも、新たな地に生活の場を移すこともかなわぬ、抜き差しならない状況に追いやられてしまった。

八ツ場ダム問題の根底にあるのは、当時者を踏みにじり利権を貪ろうとする政治的な動きであり、また、当時者の苦境に背を向けて問題の本質を問おうとしない無分別と無思慮だ。

## ＋αの一冊

### 『ゲーテンベルク』

(伝記・世界を変えた人々 15) マイケル・ポラード=著、松村佐知子=訳/偕成社/1994年

わずかな紙数の中で的確かつ必要十分にゲーテンベルクの生涯と業績を描き出しているだけでなく、ゲーテンベルク後の電算写植に至る印刷史、出版文化史まで踏まえたすごい本。書籍に関する仕事をしている人間には必読の一冊。

活版印刷術の開発には膨大な資金が必要だった。ゲーテンベルクは1439年に、ほぼ2000リットルにもものぼるワインの税金を払っている。ワイン醸造を商売にして開発の資金としていただけでなく、地下のワイン貯蔵庫を秘密の研究室として、可動活字研究のかくれ蓑としていた可能性が高いという。ゲーテンベルクの印刷機が、ワイン搾り機に酷似している理由もわかっていうもの。

宗教改革に爆発的な影響力を与えたと言われるゲーテンベルク聖書だが、じつはゲーテンベルクは、活版印刷術を使って免罪符を印刷していたことが確認されている。となれば、ゲーテンベルクは免罪符印刷によってかなりの利益を上げており、彼が事業を秘密にしていたり、その生涯の多くの部分が謎に包まれていることも納得できる。

ゲーテンベルクの活版印刷術の開発は、現在のわれわれから見ても気の遠くなるような大事業・難事業だった。作業がすべて終わり、聖書が売れるまで、お金は一銭も入ってこない。多くの研究者が指摘するように、ゲーテンベルクは技術開発者としては卓抜だったが、債務者としてはだらしない一面を持っていた。債権者ヨハン・フストとの関係はしだいにこじれ、ゲーテンベルクは裁判に負け、借金の代わりとして、活字、印刷機、進行中のすべての仕事(完成間近の四十二行聖書を含む)を全て差し押さえられ、無一文となってしまう。

ゲーテンベルクは、「活版印刷術の始祖」としての名誉こそ冠されたが、実際に何年もの苦節の末に待っていたのは「破滅」だけだった。書籍電子化は「第2のゲーテンベルク革命」とよく言われる。しかし、書籍電子化を「儲け話」としか考えないような輩にはこう言ってやりたい。「あなたはゲーテンベルクの生涯をご存じですか。ほんとうに第2のゲーテンベルクになる覚悟がおりますか」。

→しばしば「ゲーテンベルク以来の革命」と形容される電子書籍だが、書物史的に見て、ほんとうに「進化」しているのか、首をかしげざるをえない。

初期キリスト教において、書物が「巻物」から「コデックス(冊子体)」に移ったのは、パピルスからパーチメント(羊皮紙)へ、という基底材の変化ばかりではない。「ローマ政府から禁じられた文献を、衣服の中に隠して持ち歩くのに好都合」で「ページごとに番号が付されていたので、読者は読みたい箇所を簡単に探し当てることができた」(アルベルト・マンガエル『読書の歴史』)

からである。ページネーションによって、テキストは明確な座標軸を手に入れ、読書に「公共空間」が生まれた。

奇妙なことに、「コデックス革命」以来の、書物の歴史に逆行するかのようになり、一部の電子書籍やwebサイトにおいて冊子概念が消滅している。その端的な例がブログだ。webデザインの初期には、「ホームページ」という言葉に象徴されるように、ページ概念がかりうじて残されていた。それがブログにとって代われ、テキストの「巻物化」が顕著となってきた。web上では、「何ページ、何行目」という座標軸を使った知の共有ができない。さらにTwitterにいたって、「巻物」すら解体され、「竹簡・木簡」へと先祖返りしている。

▼以下は『週刊読書人』の連載コラム「著者から読者へ」で、拙著『本は物である ― 装丁という仕事』を紹介した小文

## ◎ 「物である本」のインフラを守るために

桂川 潤 (装丁家)

書籍の全文を検索対象とする「グーグル・ブックス」が始動し、書籍電子化の動きは勢いを増しつつある。iPadを愛用する装丁家のわたしは、けっして電子書籍全面否定論者ではないが、このまま書籍電子化が進めば、いずれ「物である本」が存亡の危機に瀕するという強い危機感を抱いている。「電子書籍と紙の本が共存すればいい」と多くの人が考えているが、本づくりの最前線から見ると、出版・流通という「上部構造」以上に、いま危機に直面しているのが、薄利多売で「紙の本」を支えている「下部構造」だ。すなわち製紙・印刷・製本といったインフラ＝製造業は、「紙の本」が半減してしまえば立ち行かなくなる。どんなに「紙の本」を欲しても、インフラが消滅すれば手の打ちようがない。

本書第二章は、担当した「吉村昭歴史小説集成」の製作過程を、装丁家としての視点で詳細に追ったリポートだ。「物である本」をつくるプロセスは、「生態系」とも言うべき精妙な連携に支えられている。そんな製造業の現場で今「職人技の継承」だけでなく、それを下支えする「機械の維持」が危機に瀕している。状況は「待ったなし」なのだ。

本書は、テキストを「物質＝書物」として立ち上げていく「装丁」という作業を切り口に、「物である本」をさまざまな角度と具体例から分析しつつ、書籍電子化を見据えた書物論、出版文化論を試みたものだ。

なお本書のポイントを凝縮した小文を、「装丁と〈書物の身体性〉」と題して、岩波新書『本は、これから』（池澤夏樹＝編）に寄せた。『本は、これから』は、〈書籍電子化〉を焦点に、懐疑派から推進派まで三七名が、本の過去と未来を俯瞰し考え抜いた書き下ろしエッセイ集で、本好きには興味つきない内容となっている。わたしが「物である本」を強調するのは、単なる「懐古趣味」からではない。「読書」は、人間の「歴史」と「身体性」に深く根ざす営みだ。「読書」は本文のテキストtextを視覚的に追うだけの行為にとどまらず、自身を鳥瞰しながらコンテキストcontext（状況・文脈・背景）を五感で感受し、自己編集（松岡正剛）していく行為なのだ。そんな「読書」には「物である本」が欠かせない。その理由を『本は物である』と『本は、これから』の二冊に詳述した。「本」や「読書」の行方を案ずる方々に、ぜひ手にとっていただければと思う。